県営ほ場整備事業（昭和48年度）

埋蔵文化財緊急発掘調査

広垣外・木戸口遺跡

—緊急発掘調査報告—

1974

長野県上伊那郡宮田村教育委員会

県営ほ場整備事業（昭和48年度）

埋蔵文化財緊急発掘調査

広垣外・木戸口遺跡

—緊急発掘調査報告—

1974

長野県上伊那郡宮田村教育委員会

序　　文

本村（宮田村）は数年前より全村におよぶほ場整備事業を行なっている。この木戸口，広垣外両遺跡の緊急発掘調査もそれに関連して南信土地改良事務所より依託されて行なったものである。

本村の西部は木曽駒ヶ岳であり，幅広く山並みを東に押し出している。その山裾を往時の東山道が通っており，西北の北割部落は宮田駅の所在地とも考えられている。したがってほ場整備事業がこの地におよぶにつれ調査を要する遺跡も多くなり，昭和47年には，古町遺跡・田中北遺跡を調査した。続いて昭和48年には，木戸口遺跡と広垣外遺跡を調査することになったのである。

木戸口遺跡は古くから木戸口という地名が残っており付近より古代の引き井の遺溝が発見されている。また，広垣外遺跡は北割部落中央を東南に傾斜する段丘上に広がり，先年上伊那考古学会による北端一部分の発掘が行なわれ，貴重な遺物が発見された。

今回の発掘はほ場整備事業が行なわれるこの遺跡の南端通称観音寺と呼ばれる地域のみであるから，広垣外遺跡としての全貌は今後の調査に待つものである。

この調査を行なうにあたり，調査委員会が設けられ，長野県教育委員会桐原指導主事の御指導を仰ぎ，調査団長に友野良一先生を御依頼し，玉川大学上川名昭先生の応援をいただいた。

木戸口遺跡は現状が水田に造成されていたために，好結果は得られなかったが，広垣外遺跡においては，段丘の南端湿地の境にもかかわらず，土師式住居址，及び竪穴等を発掘し，考古学の面に貢献できたことは，喜ばしいことである。

以上，この成果に対し，南信土地改良事務所をはじめ県教育委員会，調査団の諸先生方に深甚なる感謝の意を表する次第であります。

昭和48年9月

教育長　細田峩徳

例　　言

1．今回の調査は県営ほ場整備に伴う，緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2．この調査は，ほ場整備に伴う緊急発掘で，事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，宮田村教育委員会が実施した。

3．本調査は，昭和48年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし，文章記述もできるだけ簡略し，資料の再検討は，後日の機にゆずることとした。

4．本文執筆者は，友野良一，田中義蔵

図版製作者，遺構及地形実測，上川名昭，佐々木達夫，池上　悟，早乙女雅博，迫恵理子，玉木冨士子，高井優子

遺物，実測　友野良一

写真撮影者，友野良一，上川名昭，細田峩徳

5．本報告書の編集は主として，宮田村教育委員会があたった。

目　　次

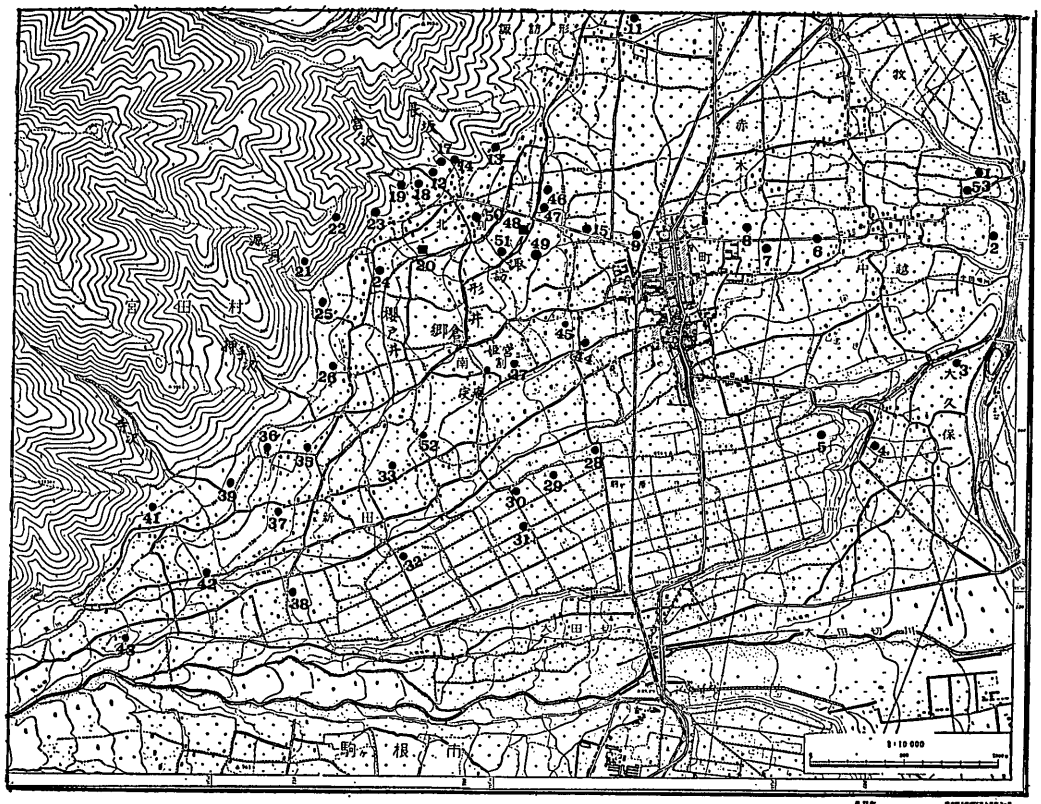
序　　文
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次
第Ⅰ章　遺跡の環境……1
　第1節　位　　置……1
　第2節　地　　形……2
　第3節　地　　質……3
　第4節　歴史的環境……4
第Ⅱ章　発掘調査の経過……5
　第1節　調査の組織……6
　第2節　発掘作業経過……6
第Ⅲ章　遺構・遺物……9
　第1節　広垣外第1号住居址……9
　第2節　木戸口遺跡……11
第Ⅳ章　ま　と　め……14

挿　図　目　次

〔番号〕	題　名	位　置	表示資料
第1図	遺跡分布図		宮田村内遺跡分布図
第2図	地　形　図		広垣外遺跡附近の地形図
第3図	地　層　図		木戸口遺跡附近の地層図
第4図	地　形　図		木戸口附近の地形図
第5図	古　　図		遺跡附近の古図
第6図	配　置　図		広垣外遺跡遺構配置図
第7図	実　測　図		広垣外遺跡第1号住居址
第8図	実　測　図		木戸口遺跡調査図
第9図	地　層　図		木戸口遺跡地層図
第10図	実　測　図		広垣遺跡遺物実測図

図　版　目　次

第1図	地　　形	上	広垣外・木戸口遺跡地形
		下	広垣外第1号住居址
第2図	遺　構　図	上左右	広垣外第1号住居址
		下左	広垣外西遺構
第3図		右	広垣外第1号住居址カマド
		上	木戸口遺跡
		下	木戸口遺跡排水施設



第1図　宮田村遺跡分布図

1. 北の城址　2. 中越城址　3. 狐塚　4. 西垣外　5. 滝ケ原　6. 中原　7. 西原　8. 中越　9. 作道　11. 安岡　12. 天白古墳　13. 伏戸　14. 真米　15. 田中北　17. 円通寺　18. 元宮東　19. 宮の沢　20. 広垣外　21. 城山　22. 古ル城　23. 西明寺址　24. 木戸六　25. 駅迦堂　26. 米山　27. 姫宮　28. 烏林古墳群　29. 三つ塚下　30. 三つ塚古墳群　31. 三つ塚中　32. 三つ塚上　33. 五升蒔　35. 松戸　36. 熊野寺　37. 高河原　38. 二つや　39. 稚児塚　41. 上の宮　42. 駒つぶれ　43. 新田丸山　44. 一本松　45. 田中西　46. 古町　47. 古町南　48. 木戸口　49. 大沢端　50. 柏木　51. 倉骨　52. 下の段　53. 中越北

第Ⅰ章　遺跡の環境

第1節　位　　置

広垣外・木戸口遺跡は，長野県上伊那郡宮田村北割に所在する。

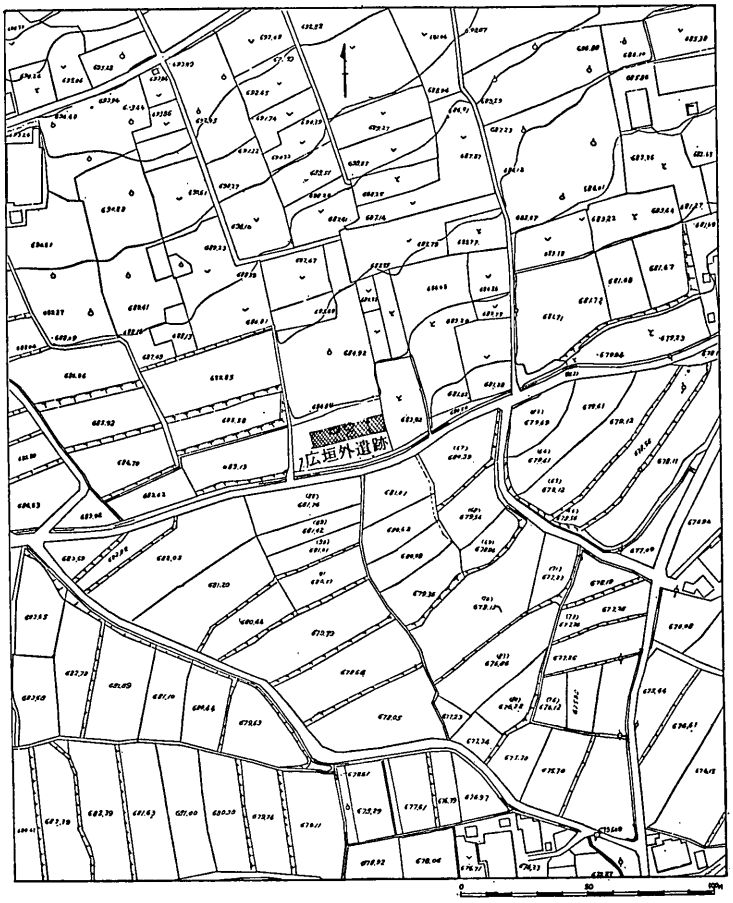
木曽山脈（「中央アルプス」ともいう。）の主峯，西駒ケ岳の東麓，標高 668.14～681.22m の間に分布する遺跡で，北は長坂の扇状地と西は宮ノ沢扇状地の間に展開している。

規模，木戸口遺跡は東西推定 50m，南北 120m と考えられる。北割線の南，諏訪形井筋附近。また，広垣外遺跡は，東西 150m，南北 140m の範囲に所在すると思われる。柏木小路の西，元宮神社の南の扇状地，桜戸井に接する位置である。

国鉄宮田駅から，村道北割線を経路として西北へ，木戸口遺跡 950m，広垣外遺跡は 1.400m の巨離にある。

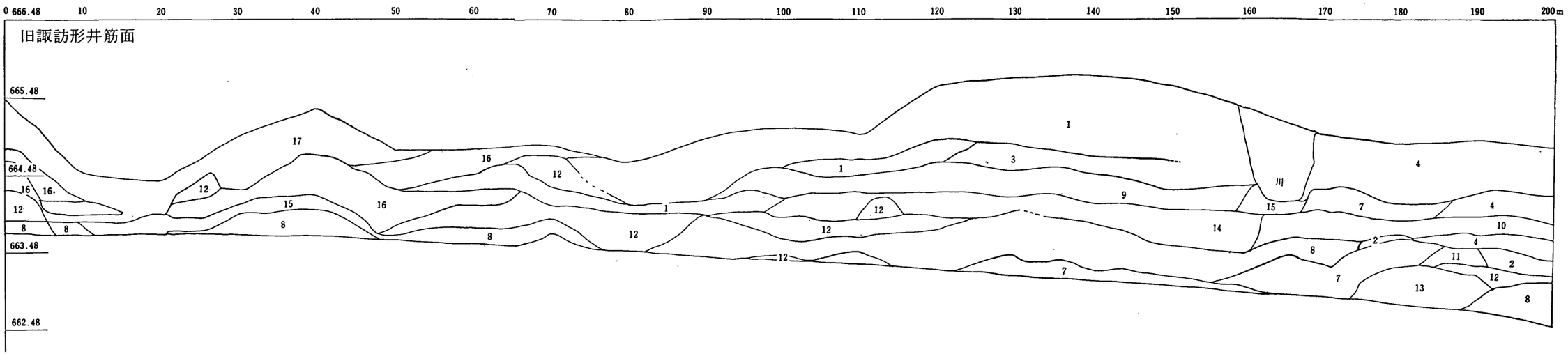
第2節　地　　形

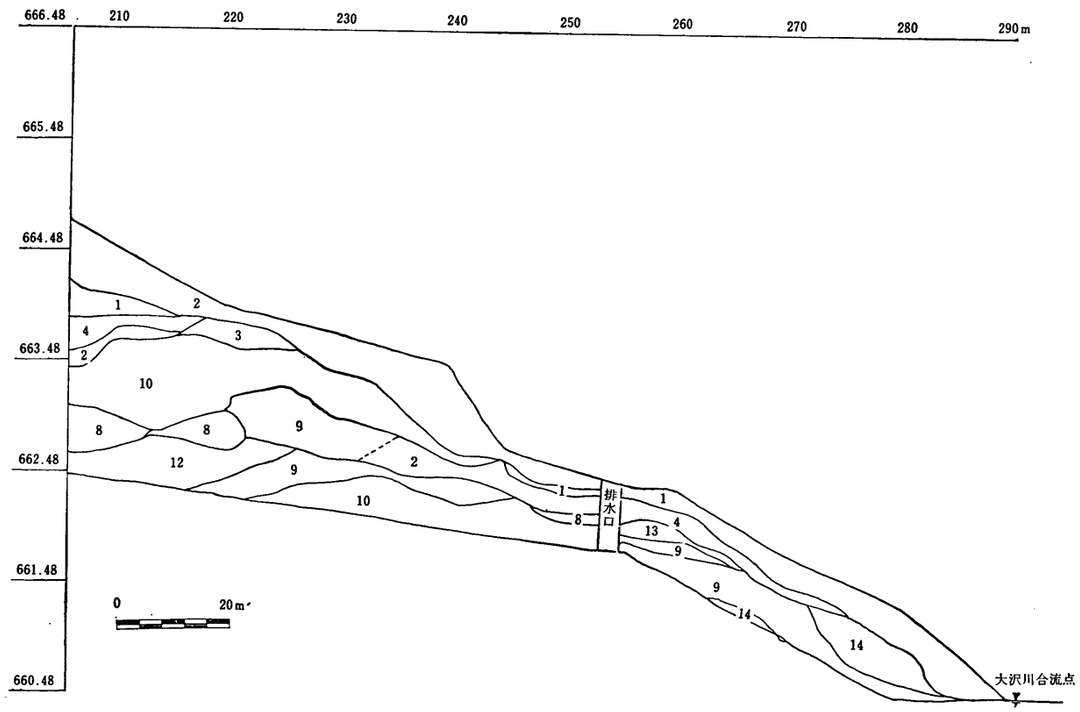
上伊那の平坦部，伊那盆地は，南北に連なる木曽山脈と，赤石山脈（前山に伊那山脈をもつ）の間に位置し，諏訪湖に源を発した天竜川が両山脈から流れ出る多くの支流を合せて南下している。東西の標高 2000～3000m 級の連山は，険しさゆえに渓流だぎり落ち，激しい流出率をもって盆地底の原野を開削する，いわゆる伊那谷特有の田切地形は，天竜川の浸蝕活動と相まって隋処に複合扇状地，河岸段丘，沖積地を形づくっているのである。盆地の東西巾は，伊那市，旧伊那町附近が最も広く 15km に及ぶが，同市西春近表木附近では 2.5km にせばまり，本村と駒ヶ根市との境附近では 8km に広がる。駒ヶ根市を南下すると，天竜川の段丘は一層複雑化し，標高差も著しく，支流の浸蝕も多い傾向を示している。盆地は，おおむね天竜川礫層の上に火山灰土層を堆積した土質で形成されている。



第2図　広垣外遺跡附近の地形図

大田切川扇状地　本村は，東西 11km，南北 3.8km，総面積の 70% が山地である。西駒ヶ岳 2956.3m に源を発した大田切川は，宮田村と駒ヶ根市との間を流れ，その最大洪水量 764 立方米，平均勾配 4.4% の河川である。この河川の形成した大田切扇状地は，本村ならびに，伊那市南部諏訪形，赤木，表木と，駒ヶ根市赤穂地区の 70% に及び，その面積は 52 平方 km といわれている。これ等基盤をなす扇状地上に前山的西山からは，桐の木沢・寺沢・押手沢・城の沢・宮の沢・長坂・真米の沢・堂ヶ沢等が作った再扇状地が山





1 黒色土層
2 黒色砂礫層
3 黒褐色礫層
4 褐色砂質層
5 黒色砂質層
6 砂質粘土層
7 青色砂礫層
8 青色粘土層
9 黒灰色砂質層
10褐色砂礫層
11赤色砂層
12礫層
13粘土性砂質層
14黒色粘土層
15黄褐色土層
16砂質土層
17黄黒土層

第3図　木戸口附近の地層図

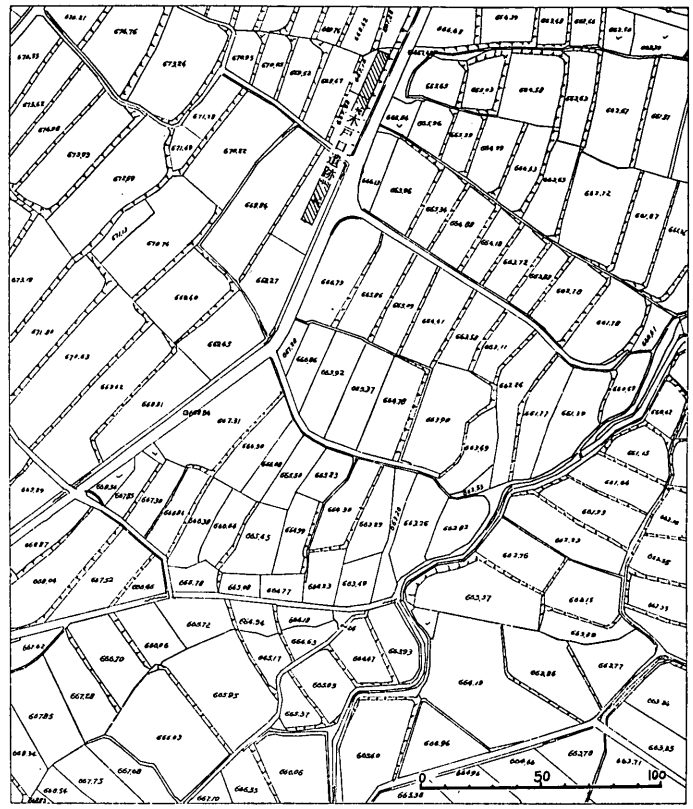
麓に分布している。この扇状地に遺跡は分布する。

第3節　地　　質

大田切川扇状地は，前述地形の項で述べたとおりであるが，この扇状地の平均勾配は2.5～4.5%である。更にその上に宮の沢及び長坂川の再扇状地が覆うている地質構造である。この地質構造は，伊那盆地の基盤をなしている伊那礫層の上に新期ロームを置くのであるが，その上に再扇状地宮の沢・長坂の基盤岩である縞状片麻岩，片状ホルンヘルスⅡ，斑状花崗閃緑岩，中粒位花崗閃緑岩等によって形成されている地質である。

木戸口附近の地層

昭和47年度古町・田中北遺跡で報告した箇所の南に設けられた排水溝の断面を調査することが出来たので，今年度も合せ報告したい。基点は村道北割線と諏訪形井の交点東より，標高（666.48）から南200mと，更に屈曲して東大沢川合流占まで290mの間の地層を調査した。その結果は木戸口遺跡附近の地層図にあるように，表土の黒色土層，同じ黒色土層でも色が異なった地質。砂層，これも色が異なるもの，礫層等一定の層位を示さず，その位置は箇所毎によって変化している状況である。これは崩壊した箇所によっても異なるし洪水年次に於いても差があるので，いちがいには断定出来得ない，このことは凹凸の多い扇状地であったことを雄弁に物語っているものである。青色粘土層は略一定した層に見付けられる，この青色粘土層の上部は植物繊維層である。この層が不透水層であってこれより上部にある水はこの層で湧水する。木戸口附近はこの層が以外に高いので湧水が所々に露出している湿地帯である。従って遺構はほとんば発見されなかった。何れかの木戸であって，宮田駅址の木戸にはどうかと考えられる。



第4図　木戸口附近の地形図

第4節　歴史的環境

宮田村において今迄に明かな遺跡数は54個所に及んでいる。遺跡の分布状況は山麓・平坦地・段丘上の三区分にすることが出来る。

山麓には，上の宮・駒つぶれ・高河原・熊野寺・松戸・米山A・釈迦堂・木戸六・城山・古城・宮の沢・元宮東・天白古墳・真米・柏木・広垣外・古町・木戸口・伏戸・倉骨・上横田・仏供面・丸山・円通寺・観音寺等である。

平坦地では　田中北・田中・一本松・作道・安岡城・西原・中城・西垣外・大沢端

段丘上では　北の城址・中越北・中越城址・狐塚・滝ケ原・烏林古墳・三つ塚下・三つ塚古墳群・姫宮・実庵・五升蒔・二つや・下の段等である。

東山道宮田駅址

大和朝廷が律令国家として，その役割を果すには，中央からの指令を一早く伝達するとともに，地方の情勢をキャッチすることが大切である。また国家財政の基をなしている調庸品の運搬等を目的としていたことは言うまでもない。

五畿七道は，京都を中心として大陸で行われていた駅伝制度を採用し，漸次地方にその網を張っていったのである。

〔東山道とは〕

東山道は，近江瀬田・美濃・信濃・上野・下野・陸奥・出羽に至る官道で，官道のうちでは一番長いものである。これは大和朝廷が東北開拓を目的として作られたもので，駅路も中路として山陽道に次いでの規模を有していた。その頃東海道は重要な道であったが渡舟が多く，たまたま難行したので，東山道によって武蔵国に通じていた。

駅（ウマヤ）は，原則として30里（約5里）毎に1駅を置き，規定の馬及び駅子を置き駅の経営を行なった。普通の駅は（馬10頭）であった。駅を支えるための駅田は3町歩与えられた。

（宮田駅）

延喜式に所見する伊那の駅は，阿智・育良・堅錐・宮田・深沢の名が見える。宮田駅は今のところ宮田の地にあてても差支つかえないと思われる。

宮田駅址については，今迄市村咸人，宮下操，篠田徳登，一志茂樹諸氏の諸説がなされているが，いずれも決定的資料に欠けているので現在迄その所在をつきとめられる段階に至っていないので，他の例に依って類推するほかない。

美濃坂東駅は，神坂峠の西に当る駅で，阿智の駅迄は12里（74里）の里程あり神坂峠を越えるため，馬30頭をおく駅である。駅子は少なくも215人は必要であったろう。宮田駅は馬10頭であるから駅子は70人くらいと推定される。駅子はおもに中戸から男子を徴集したというから，1戸2〜3人とすると，中戸は30戸が必要であった。全部中戸とは限らないから，貧戸も同数かもっと多かったとも考えられるところからして，少なくも50〜60以上の戸があったものと思われる。宮田は，沖の

第5図 遺跡附近の古図

芝を中心とした古代水田の宝庫であったので，思ったより駅の運営はらくであったかも知れない。

宮田駅址をとりまく古代文化を展望してみると，第一番に弥生式時代～古墳時代に開けた広大な水田に恵まれていたことを掲げなければならない。伊那の駅址の所在する場所は，いずれも水田に恵まれた所が多い。中でも宮田は特に多かったと考えられる。これらの水田による生産力が基盤となって，奈良朝の頃より仏教文化が芽ばえたものと考えられる。古墳の消滅が奈良朝末頃と考えられるので，その頃より古い寺が建てられはじめたのではなかろうか，現在，奈良末期の寺院の存在は知られていないが，末期の古墳からは仏教に関係した遺物が発見されているところより，何れかの形でその芽ばえはあったものだろう。寺院が確実に存在するようになったのは平安初期からであるが，宮田に於いては平安末期でないと現われてこない。現在知られているのは，熊野寺平安末期，全昌寺鎌倉末期等であるが，その他の寺院はそれ以降であろう。伝説に依れば，寺沢には古い寺があったと云う説もあるが，詳びらかではない。神社は，弥生式時代には相当明確な形で存在したと考えられる。現在，弥生式集落は，姫宮神社附近から実庵にかけての一帯は，弥生式の大集落址であることは今迄の調査で解っている通りである。この大集落の中心をなしたのは，当時の氏族である。従って氏神は氏族の中心をなしていたところから，おそらく姫宮はこれ等の氏族の氏神として祀られた古社と思われる。また，これ等の古社は弥生式時代に引続いて古墳文化～平安文化へ移行さがれて行った，こののとは姫宮附近を中心として土師時代の大集落が発見されていることに依っても知ることができる。駒ヶ原三つ塚及び，烏林古墳は，姫宮附近に住んでいた地方豪族の墓であることは略確実である。また，宮の沢及び長坂の扇状地にも，古墳時代の大集落が存在したことは，今迄の調査で知られているところである。そのほか柏木・真米・等の地名も駅址としての有力な地名と考えられる。明年度から姫宮神社附近がほ場整備の予定と聞いているが，もしその様な事態が起ったならば，宮田駅址として最有力視されるであろう。姫宮神社附近の保存について村を挙げて真剣に考えて見なければならないことと思う。

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の動機

本村のほ場整備事業は，全村を対象に施工を計画し，初期年度に於いては大久保地区53ヘクタールが昭和44年と45年の2カ年にわたり，団体営として行なわれたのであった。

昭和45年に立てられた総合開発計画は，重要施策の一環として，残る531ヘクタールを県営により数年間の継続事業とし実施することとし，昭和46年，中越地区から着工した。

宮田村は古くより開けた所であるだけに，遺跡分布図に示すように全村にわたって分布している埋蔵文化財を，全部除外して施工出来るわけにはゆかず，村教育委員会ならびに文化財保護委員会は鋭意保護対策に苦慮してきたのである。その年伊那市下牧地区には重要な遺跡が所在することは前より知られていることより，中越地区北の城上の調査を行ない多くの貴重な資料を得，不十分ながら保存

対策の意をまっとうすることができた。昭和47年度北割地区，古町・田中北両遺跡の調査が行われ多大の成果を収め，報告書が刊行された。昭和48年度は47年度に引続いて南信土地改良事務所と村との間に調査に関する委託契約が成立するところとなった。

そして，南信土地改良事務所はもとより，関係者各位の並々ならん御協力のもとに，調査は教育委員会が担当して行なうことになったのである。（田中義蔵）

第2節　調査の組織

広垣外・木戸口遺跡緊急発掘調査会

委員長　向山雅重（宮田村教育委員長）
副委員長　篠田徳登（宮田村文化財保護委員長）
委　員　宮木芳弥（宮田村教育委員）
小木曽　清（　〃　）
新谷和美（　〃　）
田中義蔵（宮田村文化財保護委員）
平沢　茂（　〃　）
太田　保（　〃　）
友野良一（　〃　）
細田峩徳（宮田村教育長）

調査員　佐々木達夫（東京大学博士課程）
池上　悟（立正大学博士課程）
早乙女雅博（東京大学生）
迫恵理子（玉川大学生）
高井優子（　〃　）
玉木冨士子（　〃　）
補助員　田中義蔵（宮田村文化財保護委員）
平沢　茂（　〃　）
篠田徳登（　〃　）
小木曽　清（宮田村教育委員）
事務局　加藤勝美（　〃　）
指導者　桐原　健（県教育委員会主事）

広垣外・木戸口遺跡緊急発掘調査団

団　長　友野良一（日本考古学協会員）
副団長　太田　保（長野県考古学会員）
上川名昭（日本考古学協会員玉川大学講師）

第3節　発掘作業経過

7月20日

北割地区ほ場整備に伴う，木戸口・広垣外遺跡発掘について作業の打合わせを宮田村福祉センターに於て行なう。

調査団長友野良一・副団長・太田保外宮田村文化財保護委員が出席し，発掘予定並びに調査方法等について話し合う。

本日宮田駅址の調査でおい出願った一志茂樹博士の実地調査が行われ，駅址調査のあり方について有益な御教示を賜わった。

7月21日

木戸口遺跡の発掘を開始する。土地改良のブルドーザにて先に水田の耕土の除土が行われていたの

で，その後にグリッドを設定する。発掘の準備完了。人員　調査員７名，作業員５名

7月22日

木戸口遺跡調査

本日から本格的な発掘に取りかかる。前日設定されたグリッドを二・三名に分かれて調査，木戸口遺跡は長坂川の扇状地であるため，角礫混り土砂が何層かにわたって堆積していることが明かとなる。その堆積状態が波状をなしているため，平面的な取らえ方が困難な状況である，遺物出も少かった。また，所によっては地下水が高く地表下 50～60cm で湧水のある場所もあった。昔排水工事が行われたらしく，暗渠施設がグリッドに現れた所も見受けられた。

7月23日

木戸口遺跡調査

本日は前日に引続いて調査，予定したグリッドの調査を終了したが，遺構は発見出来なかった。全体測量と，各グリッドの測量及び，写真撮影。本遺跡は，古町遺跡と扇状地では変らない等高線上に所在することより，市村咸人先生の言う地名からして宮田駅址の木戸口に当る箇所で，駅址研究上重要な地点であると指摘された所でもあり，駅址に関係した遺構・遺物が出土するのではないかとし調査したのであるが，それらしき成果を得ることはできなかった。

7月24日

広垣外遺跡調査

本日より広垣外遺跡に調査の舞台を移す。天幕及び発掘機材運搬を行なう。

広垣外遺路は，宮の沢扇状地と長坂川扇状地の複合された南端に近い場所で，桜戸井筋を挾んで南北に分布する遺跡で，東西 150m 南北 140m にわたっている。遺跡の南は宮の沢川が流れ沖の芝原地籍と相対している。遺跡地の約二分の一は湿地地帯であるが，然しこの湿地帯にも遺物が出土する。

7月25日

桜戸井筋に添ってグリッドを設定する。東から北に向ってA～F，東から西に向って1～18，一辺2m 毎に 90 グリットを設定して調査を開始する。A～18 までは土砂が積上げてあって調査は困難，B～10 はAの通りの如く土砂の積上げで調査はできない状態，Cの２分の１北４迄と，Dの４，Eの４とFの４迄のグリッドの調査，遺物は土師，須恵が多く出土した。

7月26日

前日に引続いて調査，住居址のプランの一部を発見，中心にベルトを残して調査を進める。本日よりDの5～西側の５の通りの西側まで調査を拡張する。これ等のグリッドより土師・須恵器の小破片が発見された。

7月27日

25日発見された住居を第1号住居址と命名する。この住居址の調査を行う班と，D, Eの通りの調査を行う班と別れて作業を進める。

7月28日

本日は前日に引続いて調査，床面の一部が発見される。床面は黒色の砂礫層に作られたもので，硬く踏固められている。西側のグリッド調査も逐次拡大して行く。砂層や砂礫層の中に遺構があるらしく調査は困難を極める。

7月29日

第1号住居址の柱穴が一部発見される。西側C, D, Eの12グリッドまで逐次調査を進める。

7月30日

本日は雨で発掘は休みとなる。調査員は遺物の整理作業を行う。

7月31日

小雨模様であるが，早乙女調査員を中心にして第1号住居址の測量を行う。本日までで一応の調査は終了したが，まだ遺構の実測が残っているので，調査員の一部が居残って調査に当る。

8月1日

小雨模様の天気であったが，昨日に引続いて第1号住居址の測量，上川名昭調査員帰京，西側Cの13までとDの13，Eの12グリッド迄調査は拡張される。C, D 11, 12グリッドに小さな黒色土の落込みのあるのを発見。また，Bの12グリッドに石囲炉らしきを発見。また，B13と12にまたがって平盤石の配石と思われる遺構を発見。その外，D-8グリッドに楕円形竪穴，Eの8・9・10にまたがって竪穴が発見される，その西側にも竪穴が検出される。Eの11・12にまたがって経1.6m深さ2もあろおかと思われる竪穴も発見された。

8月2日

第1号住居址の写真撮影，残った遺構の実測の作業を行う。

8月3日

予定より残務整理のため調査期日が三日間延長したが，思いがけない新しい時期の遺構や遺物が発見されたことは，今回の調査を通じて大きな成果であ

発掘風景

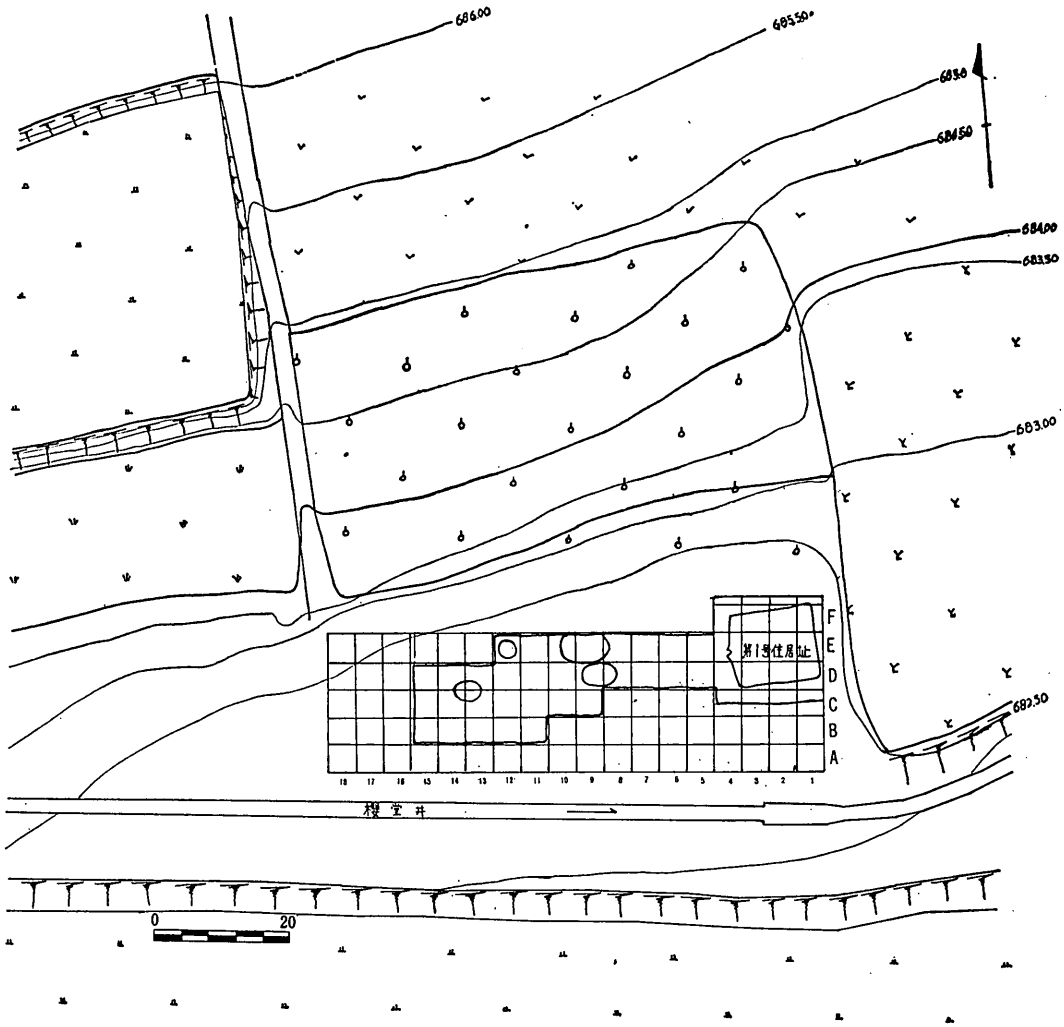
った。

第Ⅲ章　遺　　構

第1節　広垣外遺跡第1号住居址

本住居址は，ほ場整備のため，桜戸井を改修したところ発見されたものである。遺構配置図で明かのようにC—Fの1～4のグリッド内に位置する住居址である。

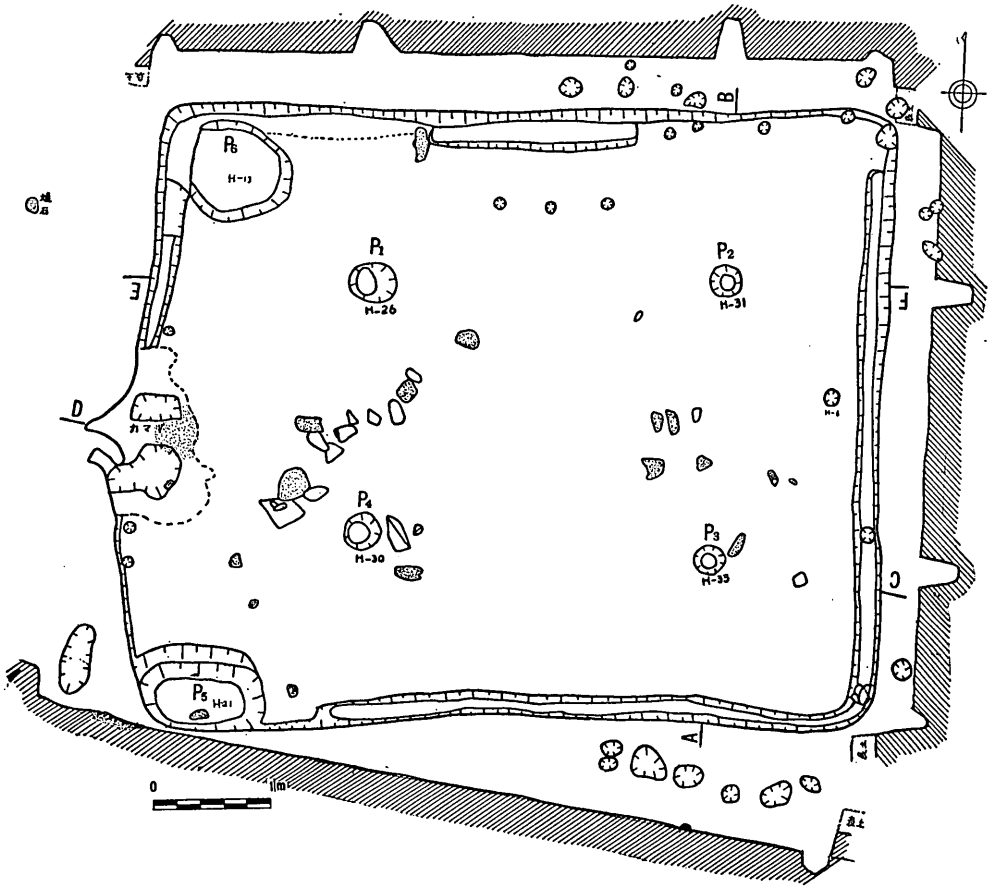
住居址のプランは，東西6.7m南北5.1m方形隅丸竪穴住居址である。面積は31.11m²，主軸の方向E89°，壁高は北側で20～26cm，南側で25～37cm，東側で18～20cm，西側では20～23cmで



第6図　遺構配置図

ある。竪穴は横色砂質層に掘り込んで作られたものである。耕土は 20～25cm，壁面傾斜は 13 度内外壁面の施設は何も発見されなかった。周湟内の施設は大小の穴が不規則であったが発見された。壁外には小柱穴と考えられるものが，壁縁から 30～47cm 内外の位置に実測図で見る如く配されている，その大きさは 8～24cm，深さ 8～12cm 直穴，位置は北側では東寄りに 6 箇，東側北寄 4 箇，南側では 8 箇，西側には南寄りに 2 箇発見された。床面の傾斜は東が西より 7.3cm 底く作られている。床面は黄色に黒色土の混じた層で作られ堅く踏固められている。床面施設は主柱 1～4 で詳細は別表の如くである。

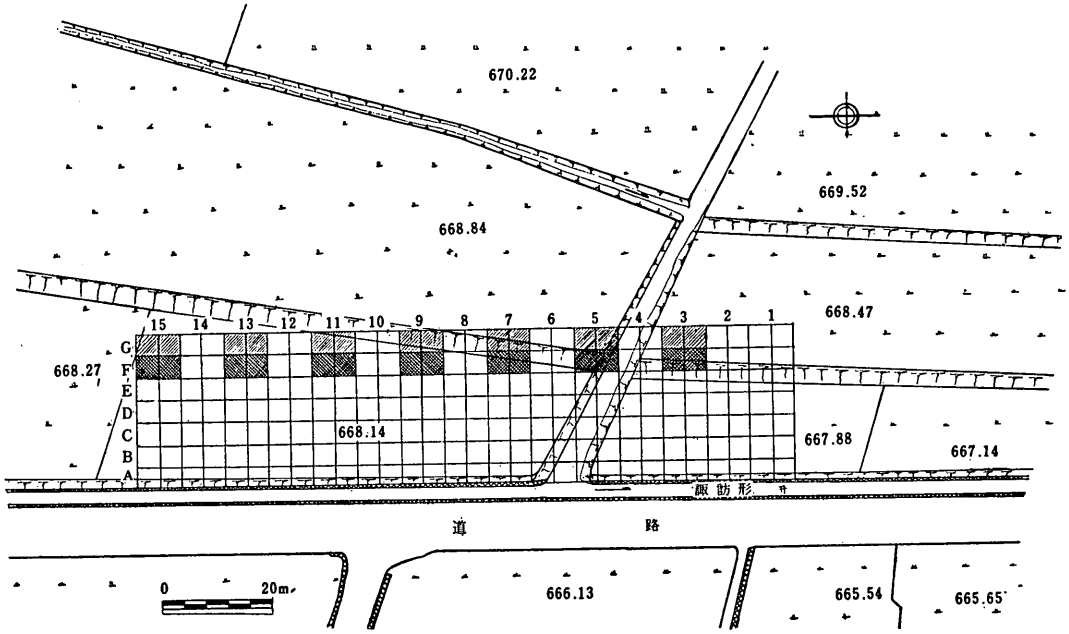
柱穴番号	形　　状	径　cm	深さ　cm
p_1	楕　円　形	長径 40 短径 36	26
p_2	円　　形	28	31
p_3	円　　形	25	33
p_4	楕　円　形	長径 32 短径 29	30



第 7 図　第 1 号住居址実測図

柱穴のほかに 7～10cm 深さ 4～6cm の小穴が発見されたが，それが施設上何であるか明かでない。そのほか，北西の隅に径 86cm 深さ 13cm の穴と，南西の隅に経 1m 深さ 21cm の穴が左右対象の位置に発見された。カマド，頭大から拳大の自然石を数個使用して作った粘土製のカマド，大きさは東西 1m 南北 90cm，カマド内は赤く焼けている。遺物はカマド附近から検出された。周湟は

北・西・南と西側は北寄りに設けられている。周湟の幅は 10～14cm，深さ 7～10cm 内外，周湟内部には大小の穴が検出された。床面上に頭大～拳大の自然石が p_3 と p_4 の附近に発見されたが，その半数が火を受けていた。



第8図 木戸口遺跡実測図

第2節 木戸口遺跡（第8図・図版第3図）

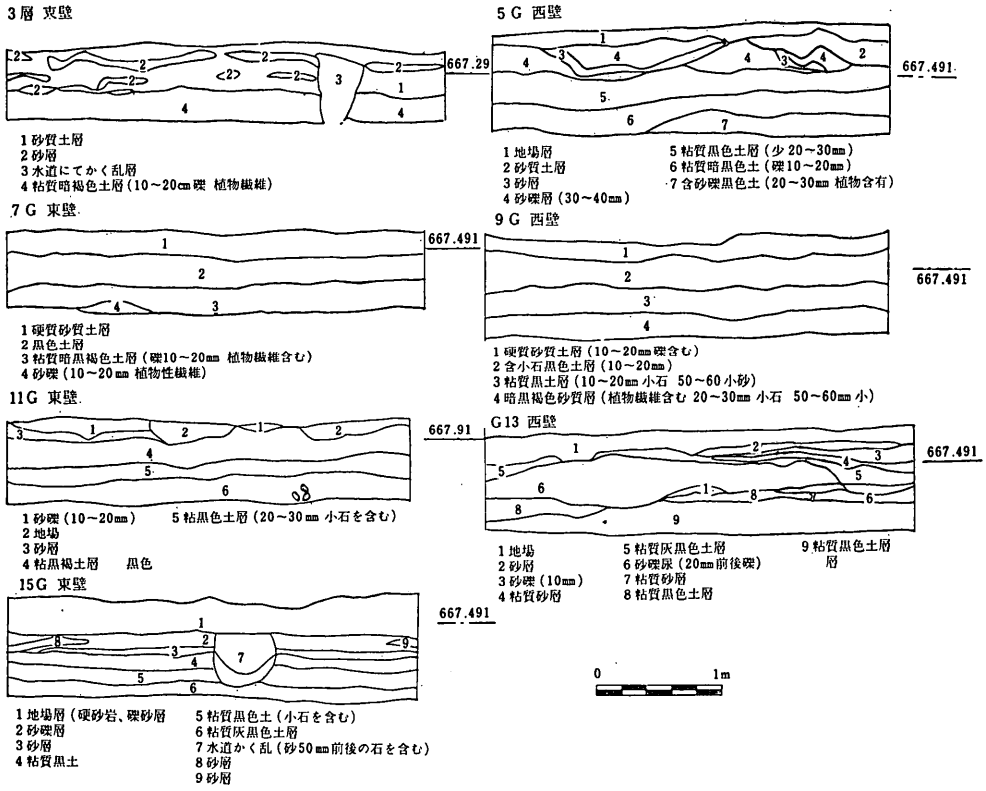
本遺跡は，宮田駅址の木戸口として考えられていた遺跡である関係上，今回の調査は駅址の木戸としての遺構が発見されたとしたら，駅址の研究上極めて重要な資料が得られると期待が寄せられていた遺跡である。木戸口地籍内に東西 A～G 北側から 4m 毎 1～15 地区に区割してグリッドを設定して調査を行った。その結果縄文中期・土師器・須恵器等の砂片がグリッド内から発見されたが，遺構らしきものはつい発見することができなかった。木戸口遺跡の上方には柏木遺跡があるところより，遺物は流出して堆積されたものではないか。また，木戸口は地形図で見るように桜戸井と諏訪形井とに挟まれた地帯でもあり，長坂扇状地の湧水は桜戸井の下より始まり諏訪形井の下部迄の間が一番多い関係で，住居地としては不適当な地帯であることが確認されたことは，今迄この地帯が宮田駅址の最有力場所と考えていたことを否定する結果となったわけである。このことは，昨年度行なった田中北・古町及び古町南遺跡の調査でも知り得たように，非常に地下水位が高く地表下 30～50cm 内外で湧水を見るという事実からして，桜戸井～諏訪形井下までは住居地帯として使用されなかったものと考えられる。

第Ⅳ章　遺　　物

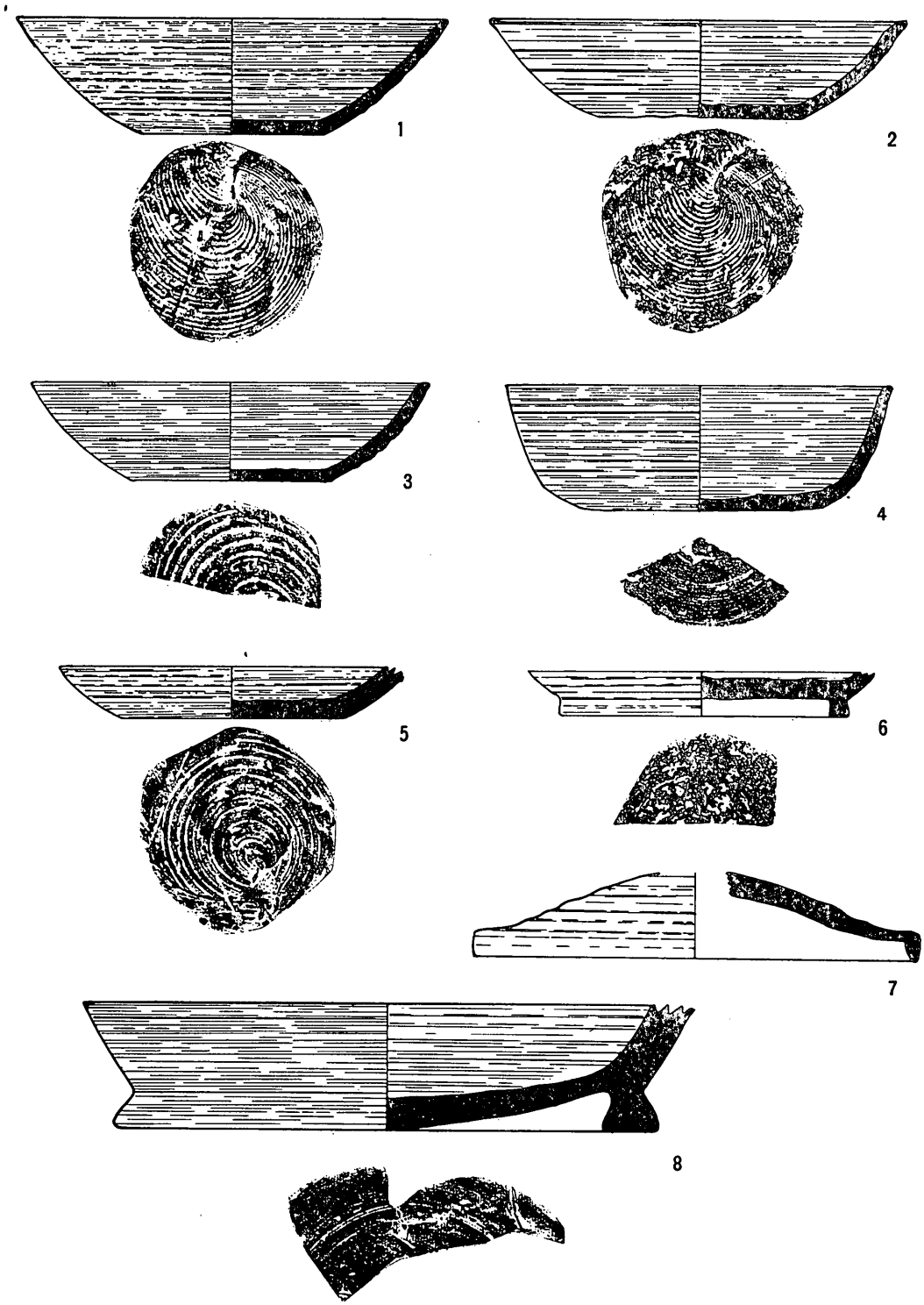
第1節　広垣外遺跡第1号住居址出土遺物（第10図）

1．須　恵　器

1）本住居址出土土器では完形品はなかった。杯形，口径は135mm僅かに外反する。底径は57mm糸切底，器面内外轆轤による水引痕をとどめている。胎土は砂質，細石粒を含む，焼成は良好，色調は灰色。2）杯形，住居址内より出土。口径は131mmでほんの僅か外反する。底部は63mm僅かであるが一部凹んだ個所が認められる。底は糸切による切放し，篦による調製は行なわれていない，胎土は砂質で細石粒を含む，焼成は良好である。成形は器面内外ともに轆轤による水引痕が窺える，色調は濃灰色。3）杯形，住居址内出土，口径120mm外反はしていない。底部は63mmやゝ荒い切放しの糸切底，器高は30mm。胎土は砂質で細石粒を含む。器面内外ともに轆轤による水引痕が窺われる。色調は口頸部10～13mm器面の3分の2程の帯状に暗灰色部分がめぐっている，そのほかは灰色呈している。5）器形は不明，底部，住居址内出土。底径は68mm。胎土は砂質で細石粒を



第9図　木戸口遺跡地層図



第10図　広垣外遺跡出土遺物実測図

含む糸切底である。成形は内外とも轆轤による水引調製。器厚は7mmで，わりあい厚手の方である。色調は灰色。焼成良好である。**6**）器形は不明である。E—2地区より出土，出土状況は黒色土層中から。胎土は砂質で細石粒を含む。高台の高さは5mm僅かに外側に開く，底部の径90mm，篦切り底。器面の内外は轆轤痕が認められる。**7**）蓋，出土はD—2，口径140mm，器高はつまみを欠いているので総高を計測することができないが，つまみの下端で26mm。口縁の立上りは直立に近い。器面は内外とも轆轤による水引調製，胎土は砂質，細石粒を含む。色調は濃灰色。焼成は良好である。**8**）甕形土器の底部である。D—2住居址内出土。高台の径は171mm，底部は中心で高台の高さと同じに垂れ下る，底部の切放しは篦切による。高台の高さは12mmで底部の巾18mmそのうち外側に4mm内側に3mm弯曲する，高台の外側には自然釉が滲みでている。器面の外側は轆轤の水引成形であるが，内側は篦削りの調製痕が見受けられる。器厚は平均12mm内外である。色調は濃灰色。焼成は良好である。土器の編年的位置は国分期と考えられる。

第2節　住居址外出土遺物（8図）

1．須　恵　器

4）碗形土器，出土地点はI—Ⅳ—2，口径120mm極く僅か外反する。器高は38mm，底径は70mm陵が立上りまで二段あり，一段目は糸切状の切目であるが，二段目は轆轤による水引痕が施されている。胎土は砂質細石粒を含む。器面内外もともに轆轤による水引調製である。色調は灰褐色。時期は第1節の項で述べたように国分期と考えられる。

2．土　師　器

第1号住居址及び住居址外出土の土師器は，小破片で器形の復原は不可能であり，かつ無文土器であったため，拓影にもしなかったが，須恵器と時期を同じうするものである。

第Ⅴ章　ま　と　め

ほ場整備に伴う緊急発掘調査も本年で2回目である。昭和47年度では田中北・古町の両遺跡の調査を行なった結果，古町遺跡では南北朝期の住居址と，その附近から平安時代の灰釉陶器をはじめ鎌倉・室町・南北朝・戦国各時代の陶器及び磁器が発見された。特に中国龍泉の青磁は注目に価いするものである。また，天目茶碗（南北朝）・灰釉印花紋（鎌倉）等数多く発見され，古瀬戸・中津川・美濃・常滑等から持込まれたものであることも判明し，その当時の文化を知る上に重要な資料を得たのである。

これら詳細の報告は，会計年度内に「古町・田中北遺跡緊急発掘調査報告書」として発刊してあるので必要に応じて見ていただきたい。昭和48年度は，前述の成果を基として，木戸口遺跡及び広垣外の両遺跡の調査を実施した。その結果調査中に把握し得た二・三の問題点に就いて所見を述べ今後

の研究と保存措置の参考に資したい。

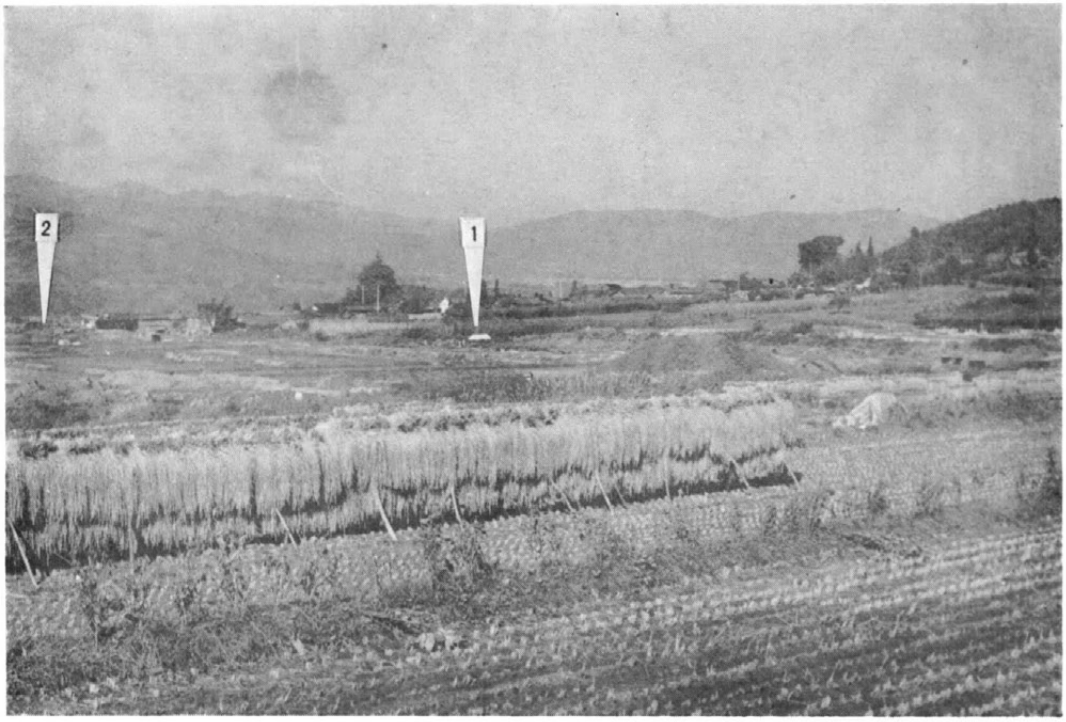
言うまでもなく，本調査は長野県南信土地改良事務所から宮田村教育委員会が委託を受け実施した事業である。本年度も昨年度同様「東山道（アヅマノヤマミチ）」の宮田駅址の所在の一部木戸口遺跡の調査が第一の目的であったことは言うまでもない。しかし，調査の結果，木戸口遺跡は地下水位が高く住居地帯としては不向きな個所と言う結果になった。長坂扇状地の地下水が桜戸井より諏訪形井の下大沢川迄の間は，部分的には住居地として使用できる場所もあり得たが，宮田駅址としての大規模な施設は到底営むことは不可能であったと考えられる。現在もこの準湿田地帯には民家は一軒も存在しないことをみてもうなずけるところである。そうすると，厳密なる意味での木戸口と言う地名であるから，駅址はそれより離れた場所に設けられたと解釈できないこともない。いずれにしろ，駅址はそう遠くない所に求められるという感がしないでもない。しかし，一方駅址の木戸口ではないのではないかと言う論もまた成立するのである。今後こうした問題は早急に解決ができない問題だけに，もっと時間をかけて研究したい。遺物の散布であるが，この地域一帯に遺物が発見されると言うことは，扇状地の上方にある元宮神社東・真米・円通寺・柏木等の遺跡から流出によるものと考えられる。

広垣外遺跡，本遺跡は昭和45年春発見された上師式住居址の調査で注目されるに至った遺跡である。昭和48年度のほ場整備工事のため，本遺跡の一部が区域内にかかることとなったので調査を実施したるところ，石芯粘土ワマドをもつ土師式住居址一軒を発見した。本住居址は一般的な土師式住居址であるが，一部の施設に二・三注目すべき部分が認められたので報告したい，その一つは，周湟内に壁の保護と考えられる支柱穴が検出された，これとまったく同じ例が駒ケ根市東伊那山田第3号縄文中期末の住居址に発見されている。壁の保護施設について私自身研究不足であるため，多くの例を引用して説明し得ないが，私の知り得た範囲だと，縄文式時代は山田3号住居址の例が一般的だと考えられる。弥生式時代登呂の例では割板を利用もた例が報告されているが，弥生式時代全般が割板を使ったと断定してよいだろうか，伊那地方の弥生式住居址では，全般的に割板を使用もたとも言い切れない状況である。また，土師時代では伊那市美篶堂垣外土師式住居（泉期）では壁の保護に萱を使用もている。似上数少ない例をもって壁の保護施設を論じるわけにはゆかないので，ここでは，伊那地方で発見された例を照合しておくにとどめたい。今後壁保護施設に就いての研究を深めてゆきたい。その次に壁外の施設であるが，本住居址の壁外に発見された穴は，壁にわり方接近しているということである。今まで私の考えていた壁外の穴は棰掛の柱穴址であるとして考えていたのであるが，棰掛だとするならば，ある程度の柱穴が配列されているはずであるが，まったく不規則であるところからして，棰掛以外の施設であるかも知れない，土師時代の住宅建築は棰が地面から離れた建方であるとされているのであるが，土師式住宅が全部が全部そうした様式をもっていたのか疑問が生じてくる。この問題もまた前述壁の保護と同じく今後資料の増加をまって問題の解決をはかりたい。

広垣外第1号住居址の年代は遺物を検討もた結果国分期でも初めの時期と考えられる。住居址以外の遺構として竪穴と土坑が発見されたが完全の調査がなされなかったので，本報告から除外したが後日まとめたい考えである。そのほか，遺構附近から中世～近世の遺物が発見されているので，これも後日整理して報告したい。

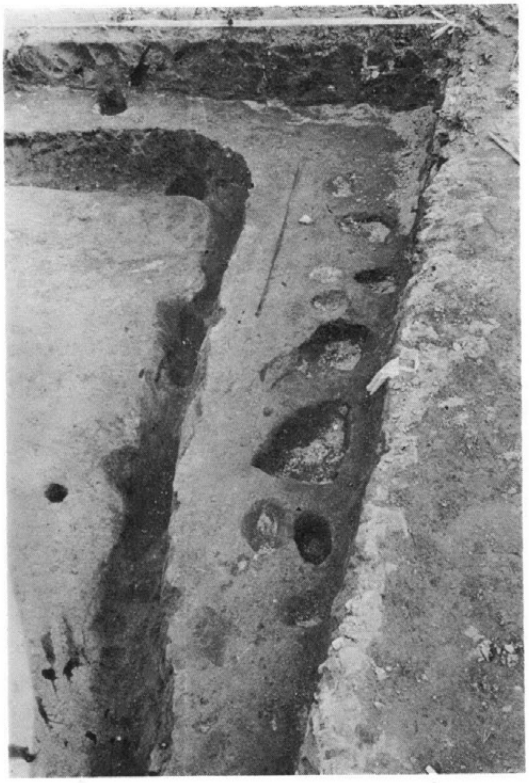
今回の調査に当り南信土地改良事務所・宮田村教育委員会・宮田村文化財保護委員会・上川名明先生・佐々木達夫・池上悟・早乙女雅博・迫恵理子・高井優子・王木冨士子調査員の皆様には七月の炎天下の発掘本当に御苦労様でした。紙上をもって厚く御礼を申も上げる次第であります。

注
1. 一志茂樹　わが国中部山岳地上代交通の一性格　信濃5巻第2号　昭和28年
2. 宮下操　平安宮田駅址踏査記　伊那路2—3　昭和32年
3. 篠田徳登　宮田駅の私考　伊那路1—3　昭和32年
4. 市村咸人　下伊那史　下伊那史4巻　昭和36年
5. 上伊那郡誌　自然編　上伊那誌刊行会　昭和36年
6. 上伊那郡誌　歴史編　上伊那誌刊行会　昭和40年
7. 大場磐雄　神坂峠　阿智村教育委員会　昭和44年
8. 長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書　宮田村　長野県教育委員会 日本道路公団　昭和46年
9. 長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書　阿智村　長野県教育委員会 日本道路公団　昭和46年



図版　第1図　　上　広垣外 (2)・木戸口 (1) 遺跡

下　広垣外第1号住居址



図版　第２図　　上左　広垣外第１号住居址西壁

上右　広垣外第１号住居址東壁

下左　広垣外西遺構

下右　広垣外第１号住居址カマド

図版　第3図　　上　木戸口遺跡

下　木戸口遺跡排水施設

広垣外・木戸口遺跡緊急発掘調査報告書

昭和49年3月20日　印　刷
昭和49年3月30日　発　行

長野県上伊那郡宮田村
発行所　宮田村教育委員会

長野県岡谷市川岸108番地
印刷所　中央印刷株式会社

〔非売品〕